

今回の東京研修では、普段聞くことのできない様々なお話を聞くことができました。以下はその一部をまとめたものです。



(1)東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻 田近英一教授

田近教授は地球惑星システム科学や地球史学など様々な分野に及んでいます。田近教授によると、地学という学問は化学や生物、物理と違い謎が多く、新しい発見で古いものがどんどんぬりかえられる学問だそうです。

そんな謎のうち私が最も興味を持ったものは、地球外生命体がいるのかということです。田近教授は宇宙のどこかに生命が存在している可能性は高く、地球外生命体はいるだろうとおっしゃっていました。しかし、微生物や単細胞生物はいても、人間のような生物はそんなにいないだろうともおっしゃっていました。理由は、微生物は水のあるところにはどこにでも生きることができよう、存在するために必要な条件が少ないからだそうです。それと同じ理由で単細胞生物も存在している可能性は十分にあるそうです。そうすると、多細胞生物は複雑なので存在するためには色々な条件が必要になるため、存在している可能性は低くなります。もし、地球外生命体がいたら、どのような姿をしているのでしょうか？田近教授によると、どのような姿をしているのかまではわからないが、有機物の生物

であると考えられているそうです。理由は、元素です。元素は番号が若いほど量が多く、それは地球であろうと宇宙であろうと変わらないからです。そのため、地球外生命体であろうとも主となる元素は変わらないから地球の生物と同じ有機物の生物であると考えられているそうです。

また、田近教授に現代社会において問題視されている地球温暖化について尋ねました。まず、地球温暖化の進度を遅くするために私たちにできることは何かあるのかと尋ねました。地球温暖化は一人一人の努力で進度を遅くするのは難しいだろうとおっしゃっていました。進度を遅くするために必要なことは、アメリカや中国などの温室効果ガスを多く排出している国が努力して温室効果ガスの排出量を減らすことが大事だとおっしゃっていました。また、市民団体やNPOなどの活動も進度を遅くするのに効果があるとおっしゃっていました。ちょっと違う視点から見ると、人口光合成やCO<sub>2</sub>を海に入れるなどの画期的なアイデアがあり、それが現実となれば、それもまた地球温暖化の進度を遅くするのに役立つそうです。しかし、今の地球温暖化は人間が起こしているものなので、進行するスピードは速いけれども地球の歴史から見ればたいしたことではないそうです。その言葉の通り、今の地球温暖化によって人類が減びるといようなことは起こらないそうです。しかし、海水面の上昇などによって人々の生活に影響が出るだろうとおっしゃっていました。また、極の氷が解けるとい地球史においても重要なことが起こる可能性もあるそうです。極の氷が解けることがなぜ地球史において重要なのかというと、極の氷が解けると氷河期が終わり、温暖期になるからです。地球温暖化は信じない人もいますが、それは変化が小さいからであって、地球温暖化は起こっているそうです。

田近教授には研究職についても尋ねました。まず、研究者になるためには、どうすればよいのかについて尋ねました。研究者になるためには、まず大学で博士号をとることでスタートラインに立てるとおっしゃっていました。また、研究テーマの決め方について尋ねました。今の研究では成果が求められていて三年間くらいしか時間がないそうです。そのため、その期間でできる研究を選んで行っているそうです。そうすると、大きいテーマの研究を行う時間は少ないので、大きいテーマの研究はちょっとずつ行っていくそうです。それは分野によっては難しいことだそうです。そのような状況なのは外国も同じで世界で大きなテーマの研究がしにくい状況にあり、それにもなって、大きな発見もなかなか生まれにくいそうです。

最後に、高校での勉強は100%身につけると社会で通用するくらいすごいもので、勉強していて損はせず、役に立つことも多いとおっしゃっていました。

田近教授には、研究のことだけでなく、私たちが生活するうえで大切なことも教えていただきました。

## (2)ディレクトフォース夏季プログラム

ディレクトフォース夏季プログラムでは、まず近藤玄大氏に基調講演をしていただきました。近藤玄大氏は義手の開発をされていて、留学をしたり、企業をしたりなど色々なことをされている方です。

近藤玄大氏は大学で修士課程修了後、ソニー株式会社に就職されました。会社では、技術とデザインとビジネスが合わさってものを世に送り出すそうです。その後、業務外で趣味として行っていた義手開発を本格的に始め exiii 株式会社を設立されました。新しいことに挑戦することには始めは抵抗があったそうです。しかし、だんだん進めていくと流れができていきその流れにうまくのっていくことでうまくいくそうです。義手の開発では、マイナスをプラスにするという発想から義手をファッションみたいにするということを意識した結果、それぞれの人のニーズに合った色々な種類の義手が生まれたそうです。このような発想が生まれたのも、幼少期や高校時代の経験が役に立ったそうです。近藤玄大氏は留学をしていました。そのため、色々な考えや価値観に触れていました。環境を変えると10年後20年後には何かが生まれてくるという言葉通りのすばらしい成果でした。

基調講演の後には、グループセッションが行われました。そこで、私たちは短い間でしたが、3人の方のお話を聞くことができました。

まず一人目は遠藤恭一氏にお話を伺いました。遠藤恭一氏は三井物産執行役員などをされていた方です。印象的だったのは複眼思考についてです。人はいつも見ている日本地図を見たときはすぐに日本地図だと気づきますが、同じ日本地図でもむきを変えられるとなかなかすぐには日本地図だと気づけません。しかし、いつもと違うものでも気づくこと、それが複眼思考を持っているということです。複眼思考があれば、幅広いものの見方をすることができます。そうすることによって新しい発見が生まれてくるそうです。

次に二人目は角田智彦氏にお話を伺いました。角田智彦氏は海洋政策推進などのプロジェクトを担当されている方です。角田氏にはお仕事のことについてのお話を聞きました。角田氏は研究者が研究したものを解釈し、それを発信して政策決定に情報を提供するというお仕事だそうです。他にも高校時代のお話もしていただきました。高校時代は自分のやりたいことがあり、そのために頑張っていたそうです。また、興味のないことも勉強することによってスキルアップや違う視点を持つことに役立ったそうです。今の自分の生活にも役立てることのできるお話でした。

最後に安達公一氏にお話しを伺いました。安達公一氏は三国フーズ社長などを担当されていました。社長についてのお話を聞きました。社長は周りの人たちに仕事をしてもらい、自身は組織を動かす役職だそうです。また、グローバル化についてのお話も聞きました。グローバル化には問題点もありますが、世界で進んでいるので、このまま進めていくしかないそうです。そのため、日本ももっと異文化を受け入れていかないと成り立たなくなるとおっしゃっていました。

このディレクトフォース夏季プログラムを通して感じたことは、若いうちから留学など

をして異文化に触れていることで、様々な角度から物事を見ることができるようになることが大切だと強く感じました。それが今のグローバル社会でも生きていくのだとも感じました。

これらの話は一部分でしかありませんが、この短い部分からでも学べることが多いほど、色々なことを経験した人生の先輩方から、たくさんのことを学びました。この研修を通して私が最も強く思ったことは、若いうちから様々な経験をすることが大切で、それは将来にも生きてくるということです。近い将来であれ、遠い将来であれ、経験を生かすことができるように様々なことにチャレンジしていこうと思います。